

何でも読もう会

| | | | | | |
|-----|-----------------------------|----------|-----------|-----|-----|
| 書物名 | 『あかい花』岩波書店 ガルシン著 神西清訳 | 開催 日時 | 2021.11.2 | 推薦 | 新田 |
| 巻・章 | 5 編中 2 編 | | 青少年セ | 出席者 | 8 名 |

作者ガルシンの生涯は短かった（1855～1888）。少年期より精神的発作に周期的に襲われ、入院、退院、再入院…。最期も迫り来る発作の恐怖により、階段上から飛び降り、それが元で死去。

ガルシンの生きた時代は、ロシアの農奴解放と「ナロードニキ」運動の最中。中小貴族の家に生まれた彼は、人民特に小作人に対するある種の負い目を感じていたという。その意味では彼を高く評価した太宰治の心情にも近いものがある。20世紀のロシア革命の手前の「夜明け前」の時代、ガルシンは傷ついた神経を総動員して珠玉の短編をものしたといえる。

表記は5つの短編からなる。「あかい花」「四日間」「信号」「夢がたり」「アッタレーア・プリンケプス」である。

「あかい花」 精神病末期患者の入院～死亡にいたる壮絶な精神的・肉体的葛藤の物語。病院の庭に咲く3本のあかいケシの花が悪の権化に思えて、何とか摘み取りたい彼の模様を張り詰めた文章で描いている。ケシが象徴する「悪」の正体は何かで議論となったが、収れんしなかった。奥が深い。

「信号」 「生」と「犠牲的精神」がテーマ。乗客を満載した列車が、故意に緩められたレールの上を何も知らずに走ってくる。それを知った線路番は何を思い、どう行動したか。最近この会で読んだ三浦綾子『塩狩峠』と並べた話になった。彼の小説の中では、日本的雰囲気との声。

他の3編もそれぞれに読み応えのある内容だった。

推薦者のNさんがロシア語で、「あかい花」の一節を朗読し、あるいは訳者による訳文の違いを整理して発表するなど大活躍だった。